

むさしのFC

No.29 (2007年3月15日)

発行：むさしのFC 西本晃二

編集：成瀬 修

題字：西本晃二

2010年の南アフリカ大会はスペインが優勝。その根拠は？

渡辺淳二

高校生の夏の大会「インターハイ」の原稿がようやく終わり、気持ちよくビールを飲んでいるところに一通のメールが届いた。「渡辺さん、むさしのFC松倉です。ご無沙汰です。体調はどうでしょうか？」ご無沙汰です、と心で返すも、「渡辺さん、体調はどうでしょうか？」とはよそよそしい感じだ。何かある。すると、パソコンの画面に松倉氏が現れる。やや斜に構え、眼鏡の向こうから意味深の目をこちらに向け、クセのある笑みを浮かべている(失敬)。そのニヤリとした感じがなつかしい。続きを読んでみよう。

「ワールドカップに思うことを書いて」
...う、悪酔い。無責任に書くより、絶対に断ったほうがいい。なぜなら、まともに見ていたのはニュースのダイジェスト版くらいだからだ。一試合丸まる見ようとするも、ほとんど途中で寝てしまっていた。準決勝だってそうだった。

「え？ 本当に書くの？」
そう自分に問いかけながら、ところがなぜか「了解しました」と返信していた。
酔ったまま、その夏の夜は寝てしまった。

世界各国のスタイル

...あれから数ヶ月が経つ。秋は一瞬にして通り過ぎ 足の速い秋山さんが駆け抜けるのではなく 寒風が頭皮にしみる季節に。焼酎のお茶割りをすすっていると、松倉氏が再びパソコンに現れた。改めて今年の夏を回想してみる。

4年に一度の大会は国際色に彩られながら、熱戦が繰り広げられた。多くのサポーターの声援も空しく日本は惜しくも予選リーグ敗退。アメリカ大陸予選で圧倒的な力を誇り、注目を集めたブラジルは早々に姿を消す。アルゼンチンも独特のリズムで観客を魅了するも、洗練されたプレイのすべてを試合結果につなげることはできなかった。一方、数年前から注目されているアフリカ勢は身体能力を生かして躍進する気配を見せつつ、土壇場での駆け引きに負け撃沈。それにしても、日本がオセアニアの国に敗れた試合は悲劇的だった...

おっと、間違えた。これは今年ドイツで開催されたサッカー・ワールドカップではなく、日本で開催されたバスケットボールの世界選手権の残像だ。実は、この夏、私はワールドカップどころではなく、仕事であるバスケットボールに恥ずかしながらはまっていた。松倉氏からの原稿依頼を断れな

かったことに、違和感を覚えたのはそのためだ。

それにしても、両者はあまりにも混同しやすい。せっかくだから、もう少しバスケットボール世界選手権を回想しよう。

フランス...華麗なプレイで上位入賞。

ドイツ...体はかたそうで不器用だが、シュート力とパワーで相手を牛耳り上位入賞。

セルビア・モンテネグロ...高さがあり、しかも柔らかさをも感じさせる技巧派ぞろい。だが、選手の気質が激しく、チームワークが乱れると修復不能。

やはり、サッカーと似すぎている。

オーストラリア...高さをフルに生かすべくパワープレイを連発し予選リーグを突破。

ギリシャ...スーパースターは不在。だが、個々がコンタクトプレイにめっぽう強く、チームプレイを武器に準優勝。

ちなみに、ギリシャはサッカー・ワールドカップに出ていないが、私が見たことのあるギリシャ・サッカーの映像と、バスケットボールの迫力は酷似していた。バスケットボール世界選手権でギリシャを見ているとき、サッカーの国内リーグの映像が脳裏をよぎり、それを經由してバスケットボールの国内リーグをイメージしたほどだ。かなり激しいやり合いが展開されているのではないか。一度、見に行きたいものだ。エーゲ海クルーズのパッケージツアーでギリシャ入りして、サッカーとバスケットボールの試合時間だけ抜け出すとか。うわ、本当に行きたい。

工作中、そんなことを考えていた。

「無敵艦隊」スペイン？

エーゲ海クルーズに関しては懸案事項にすると、当然のことながら、サッカー・ワールドカップで見られなかった光景をバスケットボールの世界選手権で見ることができた。

バスケットボールでは、若い世代の世界大会で圧倒的な力を誇ってきた「無敵艦隊」スペインが、トップレベルの世界選手権で初優勝を飾ったのだ。アメリカのプロリーグ・NBAで活躍するエースがチームを優勝に導く。決勝こそ負傷欠場するものの、そのエースの弟が兄の代役を務め、感動的な優勝を飾ったのである。

サッカーはどうか。

ヨーロッパ予選で絶対の力を誇り「無敵艦隊」と言われながら、ワールドカップで実力を発揮できないでいる国。それがスペインというのが、サッカー界でのイメージである。今年のワールドカップでも予想通り、振るわなかった。

それでも、バスケットボール世界選手権でのスペインの勇姿を鮮明に残す私にとって4年後の南アフリカ・ワールドカップは、「地元」アフリカ諸国が台頭するか、もしくはスペインが主役になってほしいという思いでいっぱいである。

サッカー界で人気ナンバーワンの呼び声が高く、トヨタカップでも来日したスペインのクラブチーム・バルセロナにはロナウジーニョだけでなく、バスケットボールチームにもすばらしいプレイヤーがたくさん所属している。今シーズン、NBAに輩出した選手もいるし、世界選手権で兄を助けた弟も、今なおバルセロナでプレイしている。

サッカーをこよなく愛するみなさんは、今、頭が混乱しているかもしれない。サッカーのことなのか、バスケットボールのことなのか。

実は、私がまさにそんな感じだ。仕事であるバスケットボールに脳内を支配されつつも、サッカーの情報を食い込ませて踏ん張っている状況。時にそれらは激しくぶつかり合い、しかしかなり似た現象がサッカー界でも、バスケットボール界でも巻き起こっている。

ドイツ大会でサッカー日本代表が泣いたのと同じように、バスケットボール日本代表も、外国籍の監督に丸投げして世界選手権で敗れた。開催国が初めて予選リーグで敗退するという屈辱的な結果に終わったのだ。競技人口が多く資金を蓄えているわりに監督をサポートするまわりの人間がだらしなないのは、サッカーもバスケットボールも同じなのかな。

現在の私の中にあるワールドカップ観は、このくらいである。

最後は暗い話になってしまったが。

むさしのFC、20周年、おめでとうございます。

時代に流されず、何が大切かを追求し続ける貴クラブの姿勢をこれからも大事にしてください。私自身は試合に出られる状態ではありませんが、ボールを蹴った後、酒を酌み交わすあの至福の瞬間をもう一度味わいたいと願っています。

松倉氏からの依頼を断りきれなかった理由はそんなところにもあったと、ここまで書

き進めてようやく気付きました。

タイミングを見計らって、大沢の練習にお邪魔します。そして、私が仕事としているバスケットボールもよろしくお願ひします。

言葉にできないその感覚

五十嵐 正憲

思い返してみると、今年で33歳になる僕が、むさしのFCに入会したのは小学校6年生のとき。すでに20年以上、むさしのFCとかかわっていることとなります。大学時代に少しだけむさしには距離を置いたけれども、やはり僕のサッカー人生はむさしのFCとともにあったのだと、改めてそう感じています。

昨年の4月から5月にかけて、ブラジル大使館に頼まれた仕事でリオとサンパウロに1ヶ月ほど行った時のことです。有名クラブチーム取材することができたので、そのことから書こうと思います。

リオ・デ・ジャネイロはポルトガルの雰囲気の色濃く残した、文化と自然が融合した街。一方、サンパウロは世界中の移民が作り出した世界的な大都市です。僕はブラジルの音楽が好きなので、滞在中にサンパの学校(エスコラ・チ・サンパ)やライブハウスなどに足繁く通ったのですが、何よりも幸運だったのは、有名サッカークラブに時間をかけて訪問することができたことでした。サンパウロのサンパウロFC、コリンチャンス、パルメイラをはじめ、リオのヴァスコ・ダ・ガマ(以下ヴァスコ)、フル

ミネンセ、フラメンゴ。なかでも、ヴァスコとフラメンゴは、選手とボールを蹴られる余裕があるほどに、ゆっくりと訪問することができました。

ヴァスコとフラメンゴ。いずれもクラブの正式名称には Clube de Regatta とついています。それは、サッカーではなく、もともとレガッタのクラブとして創設されたということを表しています。水泳やフェンシング、柔道、バスケット、バレーボールにボードゲーム、そしてフットサルにサッカーなどなど、さまざまな種類のスポーツを地元のみんなが集まってプレーしたことで、クラブは成立していったようです。フラメンゴはポルトガル移民が創設した裕福なクラブであり、一方、ヴァスコは庶民のクラブです。それゆえフラメンゴには白人が多く、ヴァスコは黒人が多い。ちなみに、ブラジルのサッカークラブではじめて黒人とプロ契約したのがヴァスコです。いずれにせよ、ヴァスコとフラメンゴはいろいろな意味でライバルチームのようでした。

ところで、2つのクラブで強く印象に残っているのは、子どもがたくさん遊んでいることでした。それは、他のクラブやサンバの学校でも一緒です。名物のおじいさんやおばあさん、その他、大人もたくさんいましたが、とにかく子どもが多い。むさしと同じように、クラブの運営は基本的に各人によるクラブ費で賄われているので参加するにはお金が必要なのですが、そんなに裕福でない数多くの子どももたくさん遊んでいました。見ず知らずのおじいさんやおばあさんと子どもたちが一緒になって一生懸命

に遊んでいる姿もよく見受けられ、さすがにプロ選手と一緒に遊ぶことは滅多にないようでしたが、目と鼻の先で、しかも凸凹のグラウンドで上手にプレーする彼らの姿を数多くの羨望の眼差しが見守っている光景は、両チームともに共通しています。

サンバの学校もそうでしたが、クラブチームに参加している人たちはみな、こぞって自分のクラブにまつわる自慢をします。あいつは40年前にプロだったんだけど、ジーコなんかよりすごいんだとか、僕のクラブはいまは弱いけど、来年は優勝するに決まってるだとか。要するに大人から子どもまで、自分のクラブが好きで好きで仕方がない。その気持ちが、見ず知らずの同じクラブの子どもたちへと伝えられていく。そんな循環というか、伝統というか、世代を超えたつながりがどのクラブにも根強く残っています。

これらのクラブのあり方が「クラブチーム」としてあるべき姿だとは思いませんでした。フラメンゴもヴァスコもクラブとしての一例に過ぎず、もっともいろいろなカタチのクラブがあるに違いないと。けれども、文化としてクラブが地域に根付くということは、これらの感覚に近いのではないかと強く共感しています。芝生のグラウンドを増やすこととクラブが地域に根付くこととは別の話であって、日本代表が本当に楽しいサッカーをするということは、芝生が増えることで成し遂げられるものではない。オシムが唱える日本的なサッカーも、未完成ながら日本人の僕が見てもなんの面白味も見いだせません。偉そうに、しかもかな

り飛躍して書いてしまいました、正直な気持ちです。

僕がむさしのに入会してから 20 年以上が経ちました。やっぱり、いつまでたってもむさしの FC は大好きなクラブチームです。そこに行けばいろいろな人に会える。むさしの FC だからこそつながりもある。それに加えて楽しい（もはや苦しいに近いですが...）サッカーもできる。ただ、数年前から言葉にできないような物足りなさというか、寂しさも同時に感じ始めています。自分自身が積極的に参加できていないことも大きな理由ですが、たまにプレーして得られる楽しさとは裏腹に、少し寂しい気がしてなりません。20 年前には感じることもなかった何かが、心の中で寂しさを作り出しているという感覚でしょうか。

どうしてそのように感じ始めたのか、言葉にできないその感覚について、もう少ししっかりと考えなければならぬ年齢に達したのかなと、今回の原稿を書かせて頂いたことで思うに至ることができるようになった気がします。

「むさしの」と私

安田泰治

まずは「むさしの FC」創立 20 周年、おめでとうございます。そしてあけましておめでとうございます。松倉さんから「20 周年記念の会報に原稿を」と頼まれた時は仕事用の原稿がいくつもたまっており、いささか消極的でしたが、今年で 26 になる私

はむさしのに関わってすでに 19 年、人生の約 4 分の 3 がむさしのという立場であって自然と「書かなくては」という思いに駆り立てられ、現在は、仕事用の原稿を後回しにして、慣れないパソコンに向かっているところでもあります。

さて、肝心のテーマですが、サッカーについて書いても私の年齢を大きく上回るサッカー暦をお持ちのおじ様方に鼻で笑われてしまうと思いますので、小学校の時から生き残り、つまり「生え抜き」の私から一言だけ書かせて頂きます。

まず、私がむさしのに入ったきっかけは幼稚園からの親友で、同じく生え抜きの山田佳尚君（ここではチャーと言った方が馴染みがあるかもしれませんね）に誘われたからという至って単純なものでした。余談ですが、当時のチャーのキャラクターは完全にジャイアンで今では想像できない人もいると思います。

当時のコーチはクラブ創立者の吉田さん（通称・コーラコーチ）平林さん、布施さんのむさしの豪華布陣が中心となって、水、金の週に 2 回、武蔵野中央公園で行われる練習に参加。しかし、現在会報を読んでいる「むさしの人」の皆さんならお分かりでしょうが、練習と言うよりも、草むしり。サッカーと言うよりも鬼ごっこ、しかも鬼ごっこも高鬼であったり、色鬼であったりと多様にわたる。といった具合で、ボールを追う機会は稀であったと言っても良いでしょう。漫画であれば、実はそれらの行動がトレーニングの一環になっていて、サッカーがすごいまくなっているという設定

でもおかしくはないと思うのですが、そんなことはいっさいなく（笑）ただただ、やりたいことをやる。

でもそんな環境だからこそ、中学、高校、大学、とメンバーは様々ですが、個性の強い面々と共に、ボールを追いかけたり、くだらないことを言い合って楽しんだり、むさしの流のサッカーライフを満喫できたと思っています。さらに、直接的にはつながらないかもしれませんが、今の仕事に関わることができたのも、ムクなどでむさしのの博識な方々に囲まれた影響が強いのでは、なんてことも思っています。

さて、そんなむさしのの夢は「ホームグラウンド」を持つこと。昔から、よく吉田さんとはファミレスで、チャーなどとは家の前でこのことについて語っていました。クラブチームとはホームグラウンドとクラブハウスがあってこそ。もちろんちょっとしたシャワーや、皆がくつろげるような部屋があり、軽食とビールで一杯なんてことも。私の祖母曰く「昔は吉祥寺は田舎だったんだよ」という吉祥寺も今や、各雑誌で「住みたい街」NO1に選ばれるほど、土地開発が進み最近では、私の実家周辺でも高級マンションが次々とそびえるというように、吉祥寺ブランドは住んでいるものが考える以上にふくれあがり、そういった意味で金

銭的にみてもホームグラウンドを武蔵野市内に構えるのはやはり難しそう。こればかりはグラウンド問題を考えるうえで、最も頭を悩ませる所であります。まあ裕福なおじ様方を中心にお金を集め、年末ジャンボ宝くじにかけてみるなんて淡い期待もあるのですが、そこはこの会報をお読みになった皆さんでムクの寄り合いの時にでも議題に挙げて頂ければ幸いです。僕も何かおいしい話があれば、すぐに伝えますので、よろしくお願いします。ちなみに余談ですが、最近茨城県のつくば市に「つくばFC」というJリーグを目指すクラブが、一面芝のグラウンドを作りました。やっぱり田舎は良いですね。偵察ついでに取材をしようと思います。

さて、むさしのと離れて早8か月。こんなにもサッカーをしない期間は人生で初めてで、なんだか寂しい気持ちでいっぱいですが、来年の合宿には直接参加できるように、記者としても、衰えはじめた体力的にも成長、回復できるようにがんばって行こうと思います。もちろん、むさしので教わった「息抜き」をしながらですが。では皆さん、またお会いしましょう。あっ若杉の皆さん、来年再び1部に上げられるようにがんばって下さい。いつもホームページでチェックしていますから。



COFFEE.BOURBON



・ランチ 11:30AM～ 3:00PM
・アルコール 6:00PM～ 12:00AM
☆ 各種パーティー承ります
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺南町1-11-3
TEL: 0422(49)4854 (日曜定休)

**気楽に集えるお店です
サッカーのビデオもあります
ぜひご来店下さい**

